

若江城跡 北鳥池遺跡調査報告



1975

東大阪市遺跡保護調査会

目 次

序 文.....	1
例 言.....	2
若 江 城 跡	
1. 調査に至る経過.....	3
2. 位置と環境.....	4
3. 調査の概要.....	5
4. 出上 遺 物.....	9
5. ま と め.....	13
北 鳥 池 遺 跡	
I. は じ め に.....	15
II. 調 査 経 過.....	15
III. 調 査 結 果.....	16
IV. ま と め.....	17

序 文

生駒山麓の扇状地末端西方、東大阪市下六万寺町に存在する北鳥池遺跡と、旧大和川の形成した微高地状沖積平野に立地し、現在の若江南町に存在する若江城跡、前者は弥生時代後期の遺跡として、後者は南北朝～戦国時代の平城跡として、当市では古くより知られ、文化的・学問的にも重要な遺跡であります。

このたび、大阪府八尾土木事務所の昭和49年度事業として一般府道四条一長堂線の道路舗装拡張整備事業が計画され、前記二つの遺跡がその路線上にあたり、当調査会がその事前調査を行ないました。この冊子は、この調査結果報告でありますが、研究者のみならず、一人でも多くの方に御活用願えればこの冊子の意義もより生きると考えられます。

調査にあたって御協力をいただいた各関係機関・学生諸氏の御好意に感謝いたします。

昭和50年9月

東大阪市遺跡保護調査会

会長 政 和 美

例　　言

1. この冊子は、東大阪市遺跡保護調査会が、昭和49年度事業として大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した若江城跡及び北鳥池遺跡における発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、若江城跡に関しては新田洋、勝田邦夫が担当し、北鳥池遺跡については上野利明、才原金弘が担当し、井田和太、飯塚典正、松田順一郎、佐々木光治、西岡義弘、有山淳司、山本克之、平井廉博がこれを補助した。
3. 本書の作成にあたっては、若江城跡については新田洋、北鳥池遺跡については上野利明がその執をとり、又、図面作成、トレース等は、若江城跡については信定悦子、込尾和夫、北原浩介、北鳥池遺跡については才原金弘の助を受けた。
又、写真撮影は上野利明によった。
尚、大阪府八尾土木事務所、高浦建設株式会社、東大阪市立池島小学校、東大阪市教育委員会各位には、特に調査進行にあたって並々ならぬ御協力を賜わり、ここに記して感謝の意を表したい。

若江城跡

I 調査に至る経過

東大阪市を東西に走る一般府道四条一長堂線は、道路幅が狭く、交通網として幾多の障害を現実に抱え、その道路拡張整備事業は目前の課題であった。折しも、この整備事業が大阪府八尾土木事務所によって計画され、とりあえず、東大阪市若江地区に於て、その施行の可能性が具体化してきた。しかし、この若江地区は今までの研究史・発掘史^①が物語るように、古代以来の歴史的、文化的な遺跡、遺物等、多くの文化財を今に伝えている地域である。又、今回の若江南町付近も、若江城跡、或いは、若江郡衙跡の遺跡範囲^②として知られ、これらの遺跡の範囲・規模・歴史的性格を知る上にも重要な地域と言えよう。若江城の中心は、当現場よりやゝ西方、現在の若江幼稚園の建物付近と考えられているが、この城は時期段階的に何度か建て直されていると思われ、遺跡の範囲としてはかなり広範囲を占めるものと考えられる。今回の調査に於ては、これらの遺跡の東への拡がりの確認、或いは、ある時期の若江城の遺構・遺物の検出等、こうした視点と展望によって為されたと言えよう。

注① 古く大正年間には『大阪府全志』、『中河内郡誌』にその研究の緒がみられる。

又、近年の発掘史を振りかえれば、

昭和42年：若江公民分館建築の際、室町時代の屋瓦と共に、土蓋を積み上げた井戸を検出。

昭和47年：若江南町にある若江小学校の校舎増築に伴う発掘調査では、奈良～室町時代にわたる多量の屋瓦、土器類、及び、井戸遺構、建築物遺構の検出により、これまで“幻の城”と言われた若江城の實在を考古学的に立証した。(東大阪市遺跡保護調査会によって調査。)

昭和49年：若江小学校便所増改築に伴う発掘調査で、該範囲であったが、室町時代の屋瓦・土器類の多量検出と構造物を3本検出した。(東大阪市遺跡保護調査会によって調査。)

昭和49年：東大阪市教育委員会が国庫、及び府費の補助事業によって為された若江付近埋蔵文化財包蔵地調査において、若江南町2丁目で、瓦積みの井戸遺構と屋瓦等の進物、又、若江北町3丁目(若江公民分館東側空地)において、東西方向に並らぶ建物跡と考えられる礎石列を検出、若江北町3丁目、現在若江農業協同組合の倉庫となっている地域において、溝状に北から南へ続く瓦ダメを検出する等、若江城に関する遺構・遺物を多く検出、大きな成果をあげた。尚、詳細については、すでに、東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15『若江寺跡・若江城跡』(東大阪市教育委員会、1975)に報告されており、これを参照されたい。

② 東大阪市教育委員会『文化財要覧Ⅱ』(1978)

II 位置と環境



第1図 周辺図

若江城、若江郡衙、若江寺等の存在した東大阪市若江本町、若江北町、若江南町付近は現在、この一般府道四条一長堂線を東西の基道として、何の変哲もない街並を呈している。しかし、この地域一帯が、旧河内国若江郡として古代より栄え、様々な歴史を今日にまで継承しているという事実はすでに周知のことである。地形的には、河内平野のほぼ中央に位置し、旧大和川の形成した冲積扇高地状の地形を為し、その歴史は古く弥生時代より始まると考えられる。若江南町付近の原始時代については明らかでないが、少し離れて若江北町、若江西新町、いわゆる第二寝屋川（旧楠根川）沿いに存在する若江北遺跡（弥生時代～歴史時代）^①と、近年、方形周溝墓等の発見によって全国的注目を浴びている瓜生堂弥生大集落遺跡の存在^②に眼を向けるを得ないのである。こうした条件の中で育ち、若江の歴史は古代よりその脚光と躍動を展開し、大化改新（645年）後は国郡制度によって各地域につくられた郡の政治を司どる「郡衙」がこの若江の地にもつくられた。若江がこの地域の政治的・文化的な中心地となつたことが推定できる。又、若江南町には奈良時代より室町時代まで存続した若江寺があったことも知られている。

さて、若江城は、南北朝の動乱も収まった明徳年間（1390年～）、河内國の守護畠山基景存立の頃、守護代遊佐氏の本拠として築かれ、旧大和川とその支流による自然要害と、南北を展望できる地の利に恵まれた城であった。

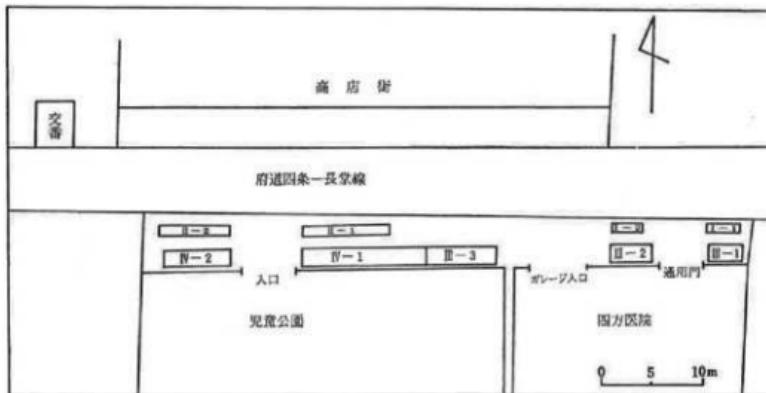
そして、この若江城はその後、応仁の乱（1467年）、或いは戦国時代の血生臭い戦場の拠点となり、数々の歴史の至難を経過しながら、時に天正6年（1578年）、その跡形もなく、この

地より消え失せてしまう。これら一連の歴史的事象については様々な見地よりの研究、或いは推測がなされているが、若江城が、歴史時代より始まる河内国争奪の拠点として、重要な役割を演じたところであることは否定できない。城の中心と考えられる現在の若江幼稚園、若江公民分館周辺には、「城」、「政所」など、城に関係する字名が残っている。

そして今、このように若江地区が、弥生時代にその歴史の萌芽をみ、古代・中世、そして現在に至るまでの歴史的創造を生み、時にはきらびやかに、時には重苦しく歴史の中で展開したであろう人間模様を、我々は現代の繁栄と平和の中に直接的に見ることはできないが、以上概述したような歴史的環境と風土をもつ地域であることをここに記しておきたい。

注① 昭和48年公共下水道第17工区管渠整備に伴う発掘調査（当調査会が調査）に於て、弥生～歴史時代の遺物を多量に検出している。

② 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』（昭和46年）『瓜生堂遺跡II』（昭和48年）



第2図 各区域トレンチ位置図

III 調査の概要

今回の調査対象地域は、府道南側歩道部分（南北約5.5m×東西約60m）であったが、この地域は一般家庭・児童公園前にあたり、全面発掘はできず、全域を4区域に分け、東側より順次トレンチを入れてゆく調査方法をとった。トレンチは計9箇所、基本として全トレンチ盛土は機械により掘削、その後は入力によって掘り下げた。以下、調査順に、各区域、各トレンチの調査について概述したい。

【第Ⅲ区域】

第1トレンチ

盛土の下は黄褐色砂層、淡黒褐色粘質土層、青灰色砂質土層と無遺物層がつづき、暗茶褐色砂質土層があらわれる。この層中に屋瓦片、須恵器片、土師器片を若干検出したが遺構はなかった。次に暗茶褐色粘質土層、茶灰色粘土層と掘り下げていったが、後層には屋瓦片、瓦質土器片、陶質土器片、土師器片を検出したが、湧水のため、平面的精査はできなかった。又、この粘土層には炭化した腐植植物遺体が多量に混在していたものの、遺構はなかった。粘土層以下は細かい灰色砂層(無遺物層)がつづき、再び激しい湧水をみたので、調査を打ち切った。

第2トレンチ

盛土約1m、及びその下につづく青灰色粘土層(無遺物層)まで一挙に掘削すると、若干の屋瓦片、須恵器片、土師器片を含む暗青灰色砂質土層となるが、遺構はなかった。

その後、青緑灰色砂質粘土層、淡青灰色砂質粘土層、茶灰色粘質土層まで順次掘り下げていった結果、各層とも、屋瓦片、須恵器片、土師器片を比較的多量に検出したが、遺構の存在は確認できなかった。この下層は第1トレンチで確認した灰色砂層があらわれたので、これで第2トレンチの調査を打ち切った。

第3トレンチ

第2トレンチ同様、かなり厚い盛土を剝ぐと、第2層(茶色褐色土層)があらわれ、多量の屋瓦片と須恵器片、土師器片、陶磁器片、瓦器等を検出したが、遺構はなかった。

次に、第3層(淡茶灰褐色土層)、第4層(茶灰褐色砂質土層)、第5層(暗茶灰褐色土層)の視角的に岐別し難い相似した3層を順次掘り下げた結果、各層にかなりの量の屋瓦片と須恵器片、土師器片、瓦質土器、磁器等の検出をみたが、どの層に於ても遺構の検出には至らなかった。

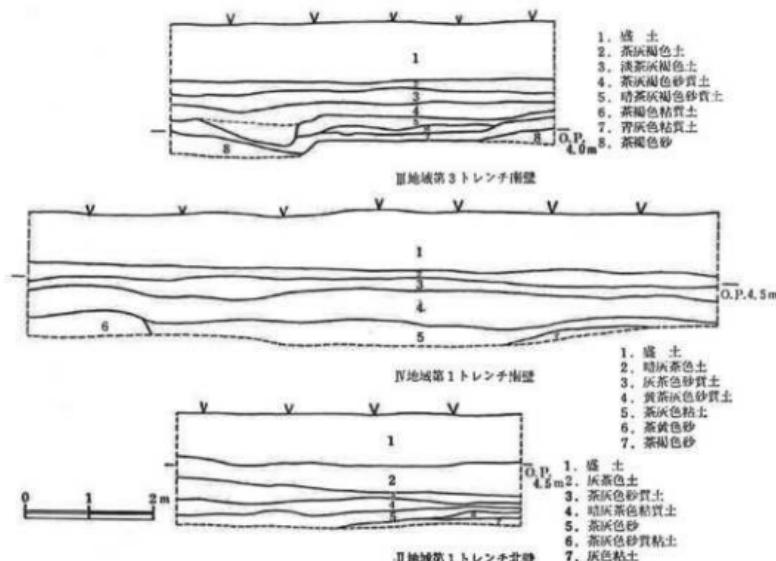
第5層は、下層になるにつれて粘質化していき、第6層(茶褐色粘質土層)、第7層(青灰色粘質土層)とつづくが、両層は無遺物層であった。第7層以下は第8層(茶褐色砂層)がつづくが湧水のため、これで調査を打ち切った。

【第Ⅳ区域】

第1トレンチ

盛土、及び、第2層(暗茶色土層・無遺物層)の下に第3層(暗茶色砂質土層)、第4層(黄茶灰色砂質土層)があらわれ、両層中に屋瓦片、須恵器片、土師器片、瓦質土器片、陶質土器片等の遺物を検出したが、遺構はなかった。

次に第5層(無遺物層)を掘り下げてゆくと、トレンチ東壁より約1.6m地点までは第6層



第3図 断面図

(茶黄色砂層)、又、西壁より約1.6m地点から約3.6m地点までゆるやかに東へ落ち込む形で第7層(茶褐色砂層)が堆積していた。前層は無遺物層であったが、後層より若干の屋瓦片、須恵器片、土師器片等を検出した。

これ以下は砂層よりの湧水のため精査できず、第1トレンチの調査をおえた。

第2トレンチ

かなり厚い盛土を除去する過程で、断面崩壊のため調査不能となってしまった。第2トレンチは掘り返しの跡がみられ、擾乱層がつづく様であった。

【第I区域】

第1トレンチ・第2トレンチ

第III区域の状況を考慮し、この両トレンチでは機械によって一層ずつ掘削、その都度、遺物、遺構の確認を行なった。結果的に、両トレンチ深さ約2.5mまで掘り下げたが、全く遺物は検出できなかった。この深さ以下は灰色砂層がつづき、湧水を多量にみたので、第I区域の調査をこれで打ち切った。

【第II区域】

第1トレンチ

盛土約80cm、及び、灰茶色土層（無遺物層）を除去すると、第3層（茶灰色砂質土層）があらわれる。屋瓦片、須恵器片、土師器片、瓦器等の遺物を含むが、遺構はなかった。

その後、第4層（暗灰茶色砂質土層）、第5層（茶灰色砂層）、又、トレンチ西側で第5層に入り込むように堆積する第6層（茶灰色砂質粘土層）を順次掘り下げていったが、全く遺物を検出することはできなかった。

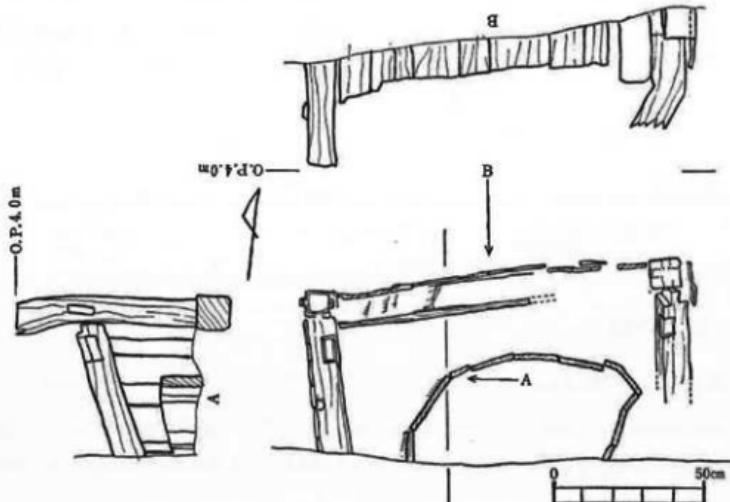
その下に若干の屋瓦片を出土した第7層（灰色粘土層）がつづくが、遺構はなかった。

この層以下は灰色砂層の無遺物層が深く堆積。ここでも多量の湧水をみたので第1トレンチの調査を打ち切った。

第2トレンチ

盛土、及び、やゝ搅乱された綠茶色土層を掘り下げてゆくと灰茶色砂層があらわれ、多量の遺物（屋瓦片、土師器片、須恵器片、陶磁器、瓦器等）を含んでいたが、遺構はなかった。

次に、東にゆくにつれて厚くなる青灰色粘土層、及び、灰茶褐色砂層（この層上面は西壁より約2m地点まで茶灰色砂層、淡灰黄色砂層という順でうすく堆積していた。）と順次掘り下



第4図 井戸遺構図

げていった結果、茶灰色砂層中のみ、屋瓦片、須恵器片、土師器片、瓦質土釜片の遺物を含んでいたが、他の層は無遺物であった。茶灰色砂層は東にゆくにつれて土質化し、この茶灰色砂質土層中に井戸遺構を検出した。この井戸遺構は、トレンチ南壁際にあたり、その全貌を把握することはできなかったが、比較的腐朽も少なく、約1.2m平方の木組みの外部施設（4本の角柱を基礎に長板を貼ったもの）を持ち、その中に径約60cmの円形の井戸枠（細長い板を組み合わせたもの）を有するものであった。下層の砂層よりの湧水が激しく、掘削深度の限界等の悪条件の為、井戸遺構について平面的、立体的精査ができなかったことは遺憾であった。

また、井戸枠内に平瓦を検出、この瓦は近世の時期と考えられ、この井戸も断定はできないが、ほど同時期の築造と推定されよう。これをもって第2トレンチの調査を打ち切った。

IV 出土遺物

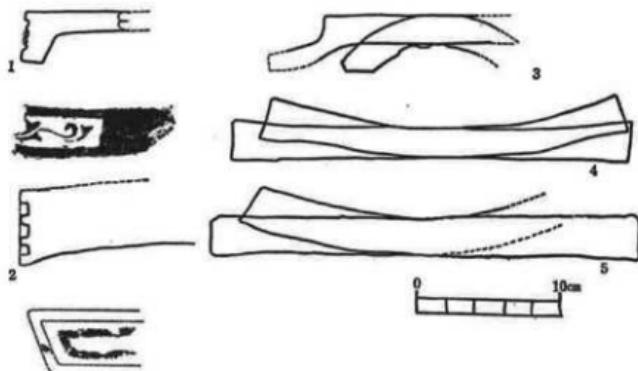
全区域における出土遺物は多種多様であったが、屋瓦がその主を占め、土師器、須恵器、瓦質土器の出土も目立った。その他、陶磁器類、貝片、桃の種等も出土した。

しかし、その遺物は全て破片として残り、ここに図化、或いは写真にして紹介できるものは僅少となつた。

また、調査条件、遺物出土状態、出土数等より個々の遺物を層位的に紹介することは困難であるため、以下、遺物の形態的説明を概述するにとどめたい。

屋 瓦 類

軒平瓦(1) III-1 トレンチ茶灰色粘土層より出土、外縁とともに二重圓線を表わした重郭文軒平瓦で、曲捺頭を呈する。この種の瓦は、難波宮跡に於て、重圓文軒丸瓦と重郭文軒平瓦



第5図 屋瓦類

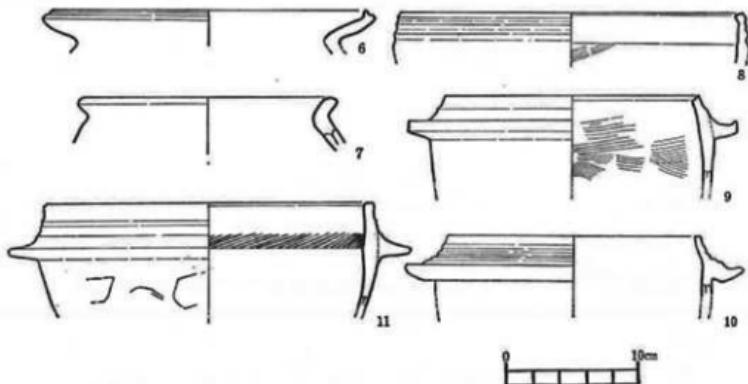
とのセット関係として出土しており、これを特色とする時代もある程度限定される。おそらく奈良時代の瓦と考えられ、若江寺に関連したものと推定される。瓦当厚5.2cm、灰黒色を呈し、胎土は長石、石英他細石を若干含み、比較的緻密である。

軒平瓦(2) II-1 トレンチ茶灰色砂質土層より出土。瓦当部分、文様を画する部分が左右に狭く縮少され、壓押しの均整唐草文を配す軒平瓦で、段頭を呈する。この種の瓦は室町時代以降の出現と考えられ、明瞭な時代限定は困難であるが、おそらく近世前半の屋瓦と推定される。瓦当厚3.6cm、灰色を呈し、胎土中には長石、角閃石、金雲母を含み、緻密である。

丸瓦(3) IV-1 トレンチ茶灰色砂質粘土層より出土。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中に金雲母、細石を含むが緻密。焼成も良好。凸面は全体をヘラ削りしたのちナデによる調整がよくなされている。凹面はヘラ削りのまゝ未調整、ヘラ痕が明瞭に残る。端部はナデ調整されている。又、瓦当部にはヨコナデ調整がみられる。この丸瓦単独で時代判定はしにくいが、室町時代の丸瓦と推定される。

平瓦(4) II-1 トレンチ茶灰色粘質土層より出土。全長28.2cm広端幅26cm、狹端幅24cm、厚2.2cm凸面に粗く太い格子状の叩目がみられるが、叩目をした後、ナデ消したようである。凹面はヘラ削りしたのち、ナデ調整がなされている。端部には刷毛目が若干残る。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中に長石等細石を含むが緻密。

平瓦(5) II-1 トレンチ井戸枠内より出土。全長29.5cm、凸面凹面ともにヘラ削りされ未調整、端部はヘラナデによって角をとっている。色調は黒灰色を呈し、胎土には金雲母、長石、他細石を含むが緻密である。焼成、良好。



第6図 土蓋

土蓋

今回出土した土蓋でここに紹介するのは6点で、土師質土蓋(6)(7)と瓦質土蓋(8)～(11)に大別で

きる。

土師質土釜(6) III-2 トレンチ淡青灰色砂質粘土層より出土。内窵する頸部に強く「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部はつまみあげた形でやゝ内側にせり出している。

色調は淡褐色を呈し、胎土中に石英、長石、金雲母等、細石を含み、やゝ粗いが硬質である。

土師質土釜(7) IV-1 トレンチ黄茶灰色砂質土層より出土。内窵する頸部より、ゆるやかな「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部は丸みをもってそのまま立ち上がる口縁をもつ。色調は(6)と同様、淡褐色を呈し、胎土もほゞ(6)と類似している。

(6)、(7)共に内・外面にナデ調整が施されている。

瓦質土釜(8) II-2 トレンチ黄灰色砂層より出土。(8)は口縁部のみの破片であるが、ほぼ直立する口縁をもち、端部はやゝせり出していて、口縁部外面にはヨコナデによって段をつけている。

色調は乳灰色（外面は黒灰色）を呈し、胎土には金雲母、細石を含み、比較的緻密である。口縁部内面はヨコナデ調整が施され、斜め方向のハケ目が帯状に残る。

瓦質土釜(9) II-2 トレンチ茶灰色砂層より出土。口縁部はなだらかに内傾し、そのままのびた口縁をもち、端部をヘラナデしている。又、外面にわずかに段をつける。

鉗はほゞ水平にのびたのち上にひきあげ、端部を丸くおさめている。口縁部外面、及び、鉗本体にはヨコナデによる調整が施されているが、鉗より下方はヘラ削りされ未調整である。内面は、不定方向のハケ目が残る。

色調は黒茶灰色を呈し、胎土は石英、長石、金雲母を含み緻密。焼成は良好の方である。

瓦質土釜(10) IV-1 トレンチ茶褐色砂層より出土。口縁部はやゝ内傾してそのままのび端部をヘラのようなものでおさえてつくる。外面にはナデによる段がみられる。

鉗はやゝ下にさがったのちゆるやかに上向きにそり、端部は丸味をおびている。外面、鉗より上部はヨコナデ調整、肩部以下はヘラミガキされているがやゝ未調整である。内面全体に縱方向のヘラ削りが施されているが、口縁付近はナデによる調整がみられる。

色調は黒灰色を呈し、胎土中に長石、石英、金雲母を含むが緻密である。

瓦質土釜(11) II-2 レンチ茶灰色砂層より出土。口縁はほゞ直立してそのままのび、外面には段をつけ、口縁端部はナデで角をとっている。鉗はほゞ水平に真直ぐにのび端は丸く、全体にヨコナデによる調整がなされている。

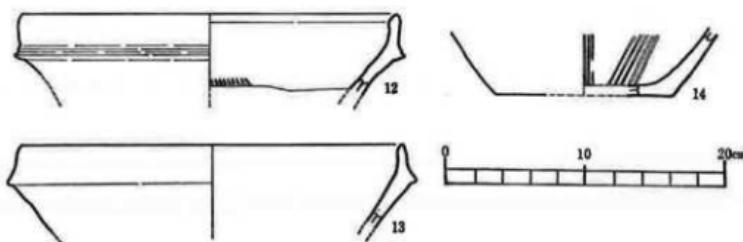
外面、鉗より上部はヨコナデされているが、下部はヘラ削りのままで未調整である。内面は全体的にハケ目を施したのち丁寧にナデ消したと思われるが、肩部には斜め方向のハケ目が明瞭に残っている。口縁に近い内面はヨコナデによる調整がみられる。

これら(6)～(11)までの土釜の時期差についてであるが、まず、同トレンチ内で出土した(8)、(9)、(11)（II-2 トレンチ内）と、(7)、(10)（IV-1 トレンチ）について層位的に考えていくと前者については古い時期より(8)→(9)→(11)、後者では(10)→(7)という段階を考えることができるが形態的にそれ程の時期差を認めることはできない。

(6)～(11)いずれも、型式的には、ほゞ15C後半～16C中頃の時代のものとして位置付けられ

るようである。

注① 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土器の編年」(『大和文化研究』第7巻7号1962)による第六期型式(15C後半~16C初頭)~第七期型式(16C中頃)にあたると考えられる。



第7図 陶質土器(摺鉢)

摺 鉢

摺鉢⑫ Ⅲ-1トレンチ淡青灰色砂質粘土層より出土。肩胴部はゆるやかに外反してのび、口縁部はほど垂直に立ちあがり、口縁端部をそそまつまみあげたゆるやかな「く」の字形を呈する。

口縁部、肩胴部とも、全体的にヨコナデによる調整がなされ、特に口縁部内、外面の調整は丁寧になされる。

口径27.0cm、色調は茶褐色を呈するが、口縁部外面は黒褐色。胎土には細石を若干含むが緻密で、焼成も良好。

また、器胴内面には、櫛状工具による条線が描かれている。

摺鉢⑬ Ⅲ-1トレンチ茶灰色粘土層より出土。肩胴部はなだらかに外反してのび、口縁部は⑫と同様、ほど垂直に立ちあがり、口縁端部をそそまつまみあげて、全体にゆるやかな「く」の字を呈している。

内外面、ヨコナデによる調整がなされ、特に口縁は丁寧にナデされている。

口径約27.3cm、灰茶褐色を呈す。胎土には金雲母、細石を若干含むが緻密。焼成は良好。

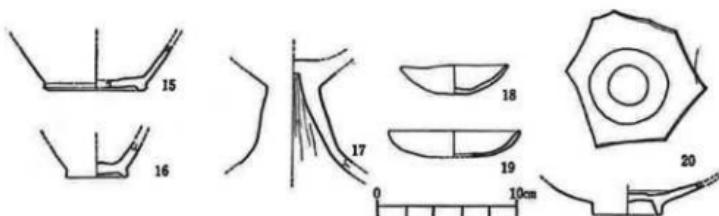
摺鉢⑭ Ⅱ-2トレンチ灰茶色砂層より出土。底部より、いわゆる鉢形になだらかに肩胴部へのびる。

底径12.9cm、灰褐色を呈し、胎土には長石、金雲母、細石を含むが、比較的緻密である。焼成は良好。内外面ともにナデによる調整がみられるが、外面は凹凸が目立ち未調整である。

また、器胴内面には、底部より櫛状工具による5~6本の条線が放射状に描かれている。

さて、これら3点の摺鉢は、いずれも口縁端部が上下に大きく拡大し、口縁の傾斜は垂直に近くなり、口縁内面は「く」字形に、外面は大きく垂れ下った口縁をもつ。これらの形態より、室町時代後半(16世紀末)のものと推定できよう。

注① 間壁忠彦「備前焼研究ノート[2]」(倉敷考古館研究集報第2号 1966) 摂鉢の推移について参考にした。間壁俊子「中世備前焼の推移」



第8図 須恵器、土師器、陶磁器

須恵器・土師器・陶磁器

図15は須恵器・杯底部、図16は須恵質土器・底部である。図15、図16共に高台を持ち、高台と胴部との境界は屈曲して明瞭で、全体的にロクロ回転によるヨコナデ調整が施されている。

図17は土師器・高杯底部で、裾がややひろがる脚をもつ。色調は淡褐色を呈し、胎土には金雲母が多く含み、長石・細石を含むが比較的緻密である。外面は縦方向にヘラミガキされているが、かなり磨滅が激しい。

また、脚内面に絞り目の跡が明瞭に残る。

図18、図19は土師質小皿で、それぞれ口径7.8cm、器高2.0cm、口径9.5cm、器高1.9cmで浅い皿である。図18は乳灰色、図19は淡灰褐色を呈し、胎土は両方とも緻密である。

図18、図19とともに内面にヨコナデの痕が残るが図18は特に右廻りの強いヨコナデを施した痕が明瞭に残っている。端部は図18、図19とともにナデられて丸みをおびている。

図20は磁器碗で、磁胎は淡緑灰色を呈し、釉は0.4~0.5mmの厚さである。見込みにはドーナツ状(環状)に重ね焼きの跡が明瞭に残っている。高台は右廻りの削り出しである。

V まとめ

今回、調査対象地となったのは南北約5.5m、東西約60m、約330m²の範囲であったが、一般家屋、道路の前という難条件のため、どの地点も東西に細長いトレンチ掘りを実行するに至った。

遺構としてはⅡ区域2トレンチ内で井戸遺構を検出したが、室町時代以降、近世のものと思われ、若江城に関連するものとは考えられない。したがって、若江城に関連する遺構検出は今回できなかった。

さて、出土遺物は、量的に屋瓦類がその大半を占めたが、軒丸瓦、軒平瓦の数は乏しく、その殆んどが平瓦の破片であった。この平瓦の凹部には細目付するものが多く、色調は褐灰

色、灰色、黒灰色を呈するものである。これら多量の屋瓦の内、一部には近世以降の屋瓦と考えられるものもあったが、その大半は室町時代の屋瓦と推定される。

その他、須恵器、土師器、瓦器、陶質土器、陶磁器等、各種の出土遺物をみたが、出土關係を示しておらず、今回の調査地域そのものが、単に若江城の遺跡としてではなく、若江郡衙、或いは若江寺等、若江城存立以前、以後をも含む遺跡の混在地域であると考えられる。

今回の調査においては直接、若江城と結びつく遺構の検出をみなかったが、出土遺物の大半は中世（室町時代頃）遺物であること等より、若江城の遺跡の範囲は少なくとも当現場東側地點までのびるということがいえるのではなかろうか。

北鳥池遺跡

I はじめに

生駒山地西方に広がる扇状地の末端部には、縄手遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が点在しているが、この中で弥生時代後期を含む遺跡としては、北から芝ヶ丘、西之辻、鬼塚、縄手、半堂、馬場川遺跡等が挙げられよう。

本調査の対象となった北鳥池遺跡は、この扇状地末端から西方へ下がったところに位置し、後期後半になって始めて集落を形成したものであることが明らかになっている。

この後期後半という時期は、中期末より始まった海面の上昇によって、潟湖の様相を呈していた河内平野が、再びその姿を表わし、集落が営まれた時期とされている¹⁾。北鳥池遺跡は、まさにこの時期に形成されたものであろう。

本遺跡は、昭和39年、大阪府営水道枚岡ポンプ場建設の際に発見され、地表下約2~4mの地点から、弥生時代後期後半、および古墳時代前期の土器が一括して出土している。また水田造構と思われる木杭列が確認された²⁾。しかしながら、調査範囲が狭く、その後、北鳥池遺跡を対象とした調査が殆ど行なわれなかつことなどから、遺跡の範囲を明らかにするには至っていない。

今回の調査は、本遺跡の西方への広がりを確認するうえで、重要な意味を持っていると思われる。

II 調査経過

トレントを府道四条・長堂線と大門川に跨られた地点に設定し、4×2.5mの範囲である。この付近は府道建設の際、約2mの盛土が造られており、現地表下約4~5mに弥生時代の造構面が存在すると考えられる。

調査は鋼矢板を使用して行なった。当初は人力で掘削の予定であったが、湧水が激しく、機械掘削にたよらざるを得ない状況であった。

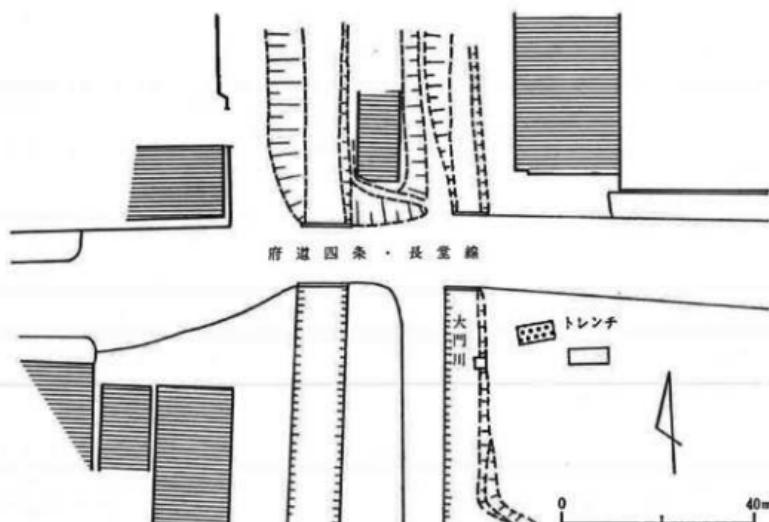


図1 調査地点平面図

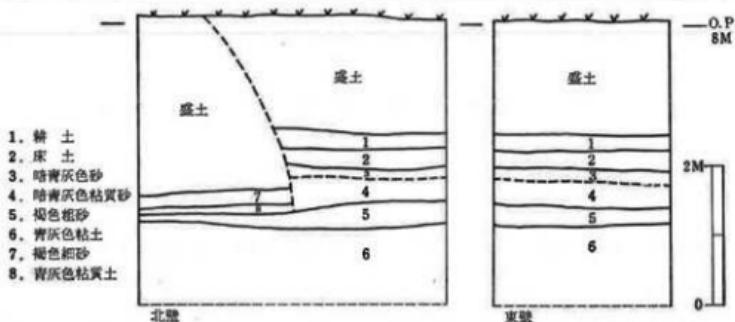


図2 トレンチ断面図

III 調査結果

1. 層 位

第Ⅰ層	耕土	地表下 160～180cm
第Ⅱ層	床土	180～205cm

第Ⅲ層	暗青灰色砂	205～220cm
第Ⅳ層	暗青灰色粘質砂	220～250cm
第Ⅴ層	褐色粗砂	250～280cm
第VI層	青灰色砂混り粘土	280～

全体にやや西に向って傾斜している。北壁西側に見られる異なった層位は、大門川の堤防によるものである。

2. 出土遺物

第Ⅰ層より第Ⅳ層では、土師器、須恵器の細片が若干出土している。すべて時期は不明である。第Ⅴ層からは室町後期と思われる練鉢、弥生時代後期の壺、甕の破片が出土している。

弥生式土器、甕（1） 口頸部のみ出土。外反する口頸部から端部を下方に拡張したもので、端部外面はヨコナデののち、三条のヘラによる沈線を施す。内外面ともヨコナデを施す。口径13.9cm。

甕（2） 底部のみ出土。外面は叩き目が残存している。底部下半部はヨコナデによる。内面はハケ目調整。底径4.8cm。

二点とも生駒山地西麓部に特徴的な胎土で暗茶褐色を呈するものである。

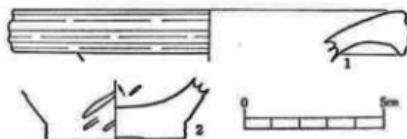


図3 弥生式土器

IV まとめ

今回の調査地点は、西を流れる恩智川の後背湿地にあたり、その堆積状況も、西方一帯に広がる泡島地区に類似している。沼沢地であった様相を示す青灰色粘土の堆積後、氾濫によって褐色粗砂が堆積したものと考えられ、練鉢や弥生式土器は、この時期に流入したものであろう。

また、泡島地区における調査の結果、本調査地点と同様の層位を示すところからは中世の遺物が発見されている³⁾。すなわち、褐色粗砂層の堆積年代は室町時代後期を逆上ることはないと考えられる。

昭和39年の調査では、弥生時代の遺物包含層は黒色有機質土であり⁴⁾、今回の調査では確認されなかったものである。

以上のことから北鳥池遺跡は、扇状地末端部に出来た砂洲状の上に位置していたものと考え

られる。恩智川の後背湿地であった今回の調査地点とは、約2～3mの比高差があり、その集落は西方へは広がっていないものと考える。このことは、枚岡ポンプ場で発見された弥生時代の遺構面が、粘質土上に堆積した砂層であることからもうかがえよう。

北鳥池遺跡は、枚岡ポンプ場から南東へ広がる、小規模な集落の可能性もあり⁵⁾、その性格を考える時、範囲と同時代、同一標高の遺跡との関連性を考えることが今後の課題であろう。今後の広範囲な調査に期待したい。

- 注(1) 安田喜憲「花粉分析等による河内平野の自然環境の変遷—弥生時代、古墳時代を中心に—」
『近畿自動車道天理～次田線建設予定地内瓜生堂遺跡第1次発掘調査報告書』所収、大阪文化財センター 昭和50年
- (2) 「北鳥池遺跡」、「河内古代遺跡の研究」所収、大阪府立花園高等学校地歴部五周年記念、昭和45年
- (3) 「池島町の条里遺構—48年度、49年度発掘調査概要—」東大阪市遺跡保護調査会、昭和50年
- (4) (2)に同じ。
- (5) 原田修氏の御教示による。

図版1 若江城跡

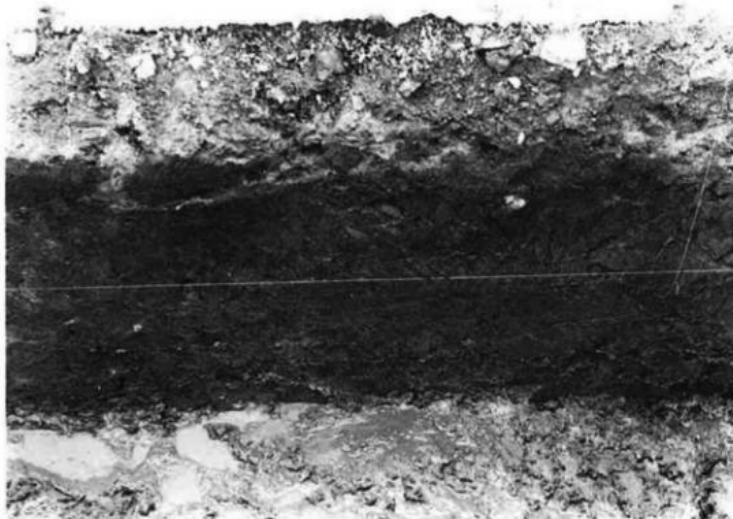


調査以前の状況



調査風景

図版2 若江城跡



IV-1 トレンチ南壁



IV-1 トレンチ東壁

図版3 若江城跡

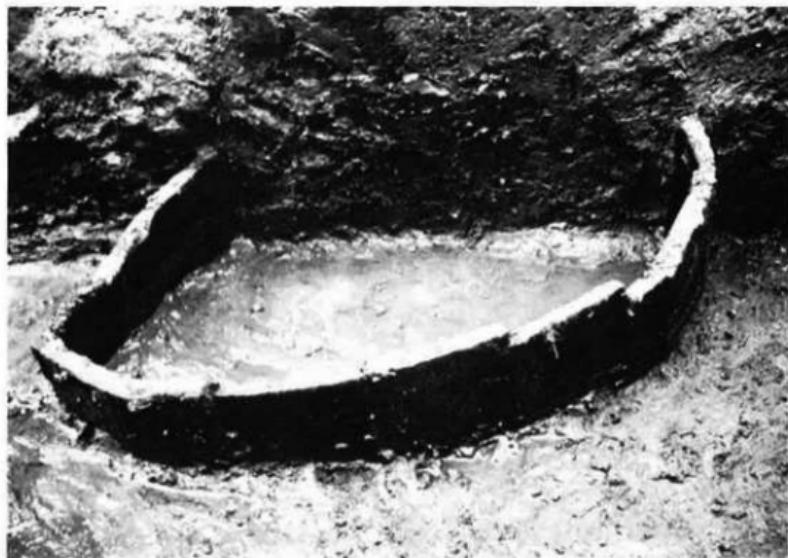


III-3 トレンチ南壁



II-2 トレンチ井戸（東より）

図版4 若江城跡



II-2 トレンチ井戸粹 (北より)



2



1

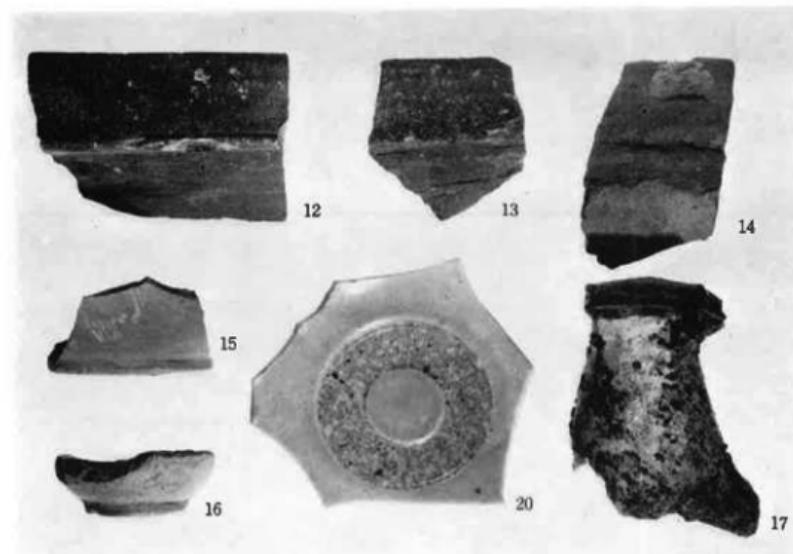
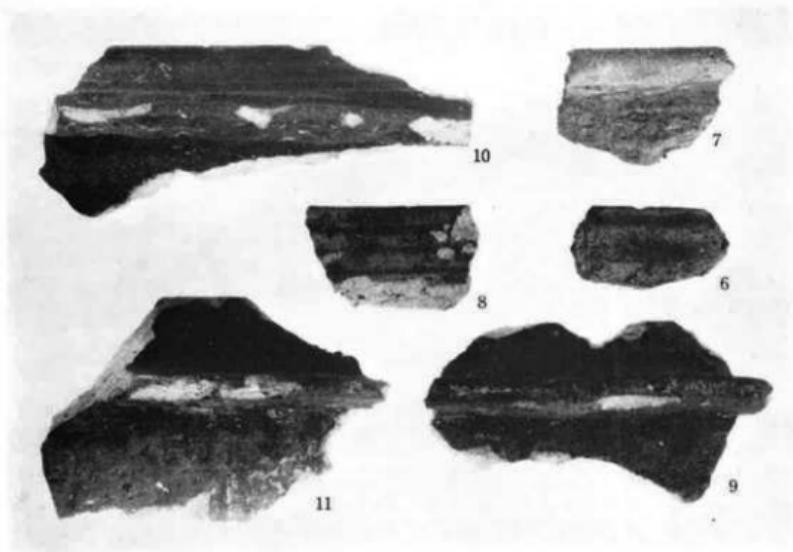


18



19

図版 5 若江城跡



図版6 北鳥池遺跡

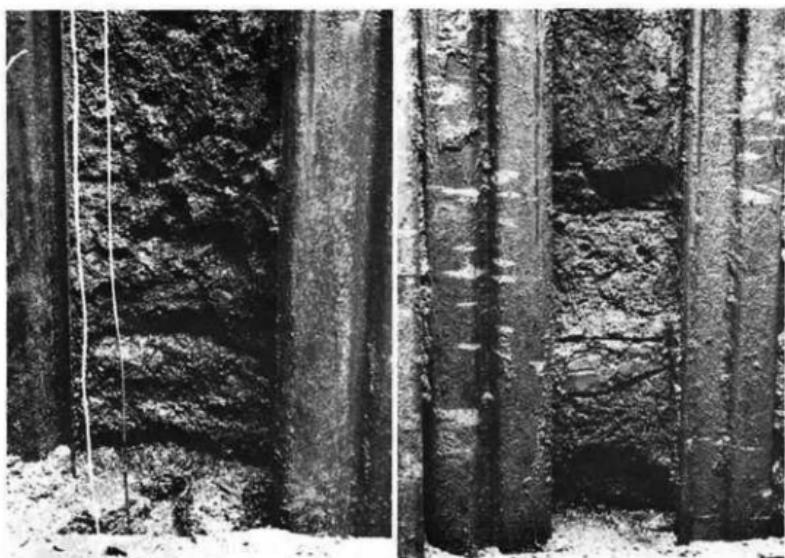


調査以前の状況



調査風景

図版7 北烏池遺跡



トレンチ断面

